

信仰教育に裏打ちされた 殉教時代の教会

有馬（ありま）の殉教者



取材協力
古巣 警神父
(長崎教区)

有明海に静かに流れていく有馬川。川幅は狭くても、その河口は広く、遠くには島原の乱で有名な原城社を眺めることができます。1613年10月7日、この河口の中間で3家族8名の信徒が、2万人の仲間の祈りに包まれながら殉教していきました。

有馬に教会が始まるのは1563年のこと。アルメイダ修道士、日本人のロレンソ修道士、さらにはコスメ・デ・トーレス神父が有馬で宣教し、燃え立った信仰は口之津、島原へと広がっていきます。なぜ日本の教会はあの時代に信者が増えたのでしょうか。それは医師であったアルメイダ修道士を中心に「ミゼリコルディアの組」が組織され、医療行為、福祉活動を通してキリストのみことばは癒しとして伝わっていたのです。彼の行く先々で、人々の痛みや悲しみに近づく教会が誕生していきました。日本人はそこでいつくしみの神に出会ったのです。

また1579年、イエズス会の巡察師ヴァリニヤーノ神父が来日し、日本文化への順応や適応を大切にしていくなかで、有馬の教会が躍動的に成長していきます。口之津の教会で最初の会議が開かれ、日本人司祭の養成の問題などが取り扱われ、1年後には有馬や安土にセミナリオが誕生し、その2年後にはヨーロッパへ4人の神学生が派遣されます。その際、印刷の技術を学ぶた

めに一緒に派遣された3人の神学生は、帰路にインドのゴアから印刷機を持ち帰り、その機械によって日本の教会に適応した「ドチリナ・キリスタン」というカテキズム（要理書）が加津佐のコレジオで出版されます。熱心な教育によって育てられた有馬は、日本でもっとも成長した教会になっていきます。

しかしこの有馬の教会も、有馬藩主有馬晴信がかかわった岡本大八事件で、陰りが生じてきます。

1612年6月9日、教会に不信を持った幕府は、全国に先立って有馬領内に禁教令を出します。有馬晴信の後継者は息子の有馬直純。しかし、長崎奉行の長谷川佐兵衛と直純の後妻国姫（徳川家康の孫娘）の力がとても強く、直純は名ばかりでした。長谷川佐兵衛は直純に対して、徳川家康に忠誠を尽くそうと思えば、主だった信徒たちの信仰を捨てさせるように命じます。こうして有馬直純は8名の主だった家臣たちを呼び出して棄教を迫ります。そのうちの5人は口先では合意を取り付けますが、3名（アドリアノ高橋主水、レオ林田助衛門、レオ武富助右衛門）は殉教することを希望します。その父の信仰に従う決意をした家族、すなわちアドリアノ高橋主水の妻アンナ、レオ林田助衛門の妻マルタ、12歳のデイエゴ、19歳のマグダレナ、レオ武富



右：殉教者の遺骨
左：有馬の8人の殉教者（カトリック島原教会）



勘右衛門の息子のパウロ。合計8名が有馬の教会の代表者として、殉教を希望します。直純は事が大きくならないように早めに処刑しようと思いますが、「聖母の組」の会員であった彼らは、その組の創立記念日でもあった10月7日の「ロザリオの聖母の日」に殉教することを望みます。

1613年10月7日、2万人の信者が早朝から手にローソクとロザリオを持ち、一番よい着物を着て、有馬川河口の両岸に陣取り、祈りをささげます。2万人が唱える祈りの声は地鳴りのように、天にとどいたことでしょう。殉教者たちの背後には、それを支える仲間たちの熱心な祈りがあるのです。やがて満潮時となり、役人が12歳のディエゴ林田を背負って舟に乗せようとする、彼は「キリストはカルワリオに行く時に歩いていきました。私にもそうさせてください」と言って、断っています。また貞潔の誓願を立てていた姉のマグダレナは、綱が焼け落ちるとひざまづき、足元の燃える薪を頭上にかざし、感謝のしるしを現したと言います。さらに母親のマルタは、炎をかいくぐり、しがみついていた息子のディエゴをしつかりと抱きしめ、指で天を指しながら「子よ、天を見なさい」と語ったと言います。

彼ら8名の遺体は翌年の1614年、追放された宣教師たちによってマカオに運ば

れ、1995年、マカオが中国に返還になる時に、長崎（西坂）に戻ってきました。多くの殉教者を育んだ有馬の教会をたずねると、そこに組織的で徹底した信仰教育を見ることが出来ます。それは今の日本の教会の課題であり、これからの道を示す大切なともしびでもあります。

有馬の殉教者（8人）長崎教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
アドリアノ高橋主水	1613.10.7	有馬	
ヨハンナ高橋	"	"	
レオ林田助右衛門	"	"	
マルタ林田	"	"	
マグダレナ林田	"	"	19
ディエゴ林田	"	"	12
レオ武富助右衛門	"	"	
パウロ武富	"	"	27

司祭不在の中で活動する宣教者 天草（あまくさ）の殉教者

取材協力
片岡 瑠美子修道女
(長崎純心聖母会)



1614年1月、天草の志岐の主任司祭ガルセス神父が追放され、60歳を過ぎたアダム荒川に信徒たちの世話が委任されます。彼は司祭不在の中で、勇気をもって使命を果たしていきました。

彼の名前にある「荒川」は、彼の出身でもある有馬の荒川に由来すると言います。1554年頃、城下町の荒川に生まれ、洗礼を受け「アダム荒川」と呼ばれました。少年時代、有馬晴信の弟に仕えていましたが、自分が犯した過ちのために殺されそうになります。幸い有馬のコレジオの院長であったモーラ神父（イエズス会の司祭）の執り成しにより、命を救われます。その後、イエズス会の修道院で働きました。1591年頃、島原半島の八良尾に、さらには天草にセミナリオが移転し、アダム荒川もいっしょに移動します。

1614年、有馬をはじめ、天草から宣教師たちが追放されます。その当時、天草全島には約一万五千人くらいの信者がいたと言います。宣教活動が波に乗っていた時代だけに、宣教師たちの追放は大きな痛手でした。慌しくマニラやマカオへと移動す

る宣教師たち。宣教師たちが不在になる時、アダム荒川は宣教師たちから信徒を支えるように託されます。それまでも彼は全身全霊で司祭たちに奉仕していました。宣教師たちも彼に信頼し、彼を修道院に住ませ、給仕、門番など、種々の仕事を与えていました。宣教師たちが旅立った後、アダム荒川が対応できたのは、ふだんから緊急時の洗礼や葬儀、幼児洗礼の方法、病人への見舞いなどを宣教師とともに関わっていたからです。まさに教会の生きた奉仕者でした。

宣教師を追放したものの、天草の領内では変化の兆しが見られませんでした。番代の川村四郎左衛門は、志岐の信者たちの背後にアダム荒川がいることに気づきます。彼をつぶさないかぎり、キリシタンたちの棄教は難しいと判断しました。当初、厳しい取り締まりは考えていませんでしたが、一向に変化の兆しがないのを見かねて、アダム荒川を捕らえることにします。アダム荒川は、いよいよ自分の殉教の時が来たというので、自分で名乗り出ていきます。川村はアダムに棄教を迫りますが、アダムは「天下の將軍様のご法度であつてもイエ

アダム荒川の墓碑（天草市）



ス・キリストに背くつもりはない」と答え
ています。

60歳を過ぎたアダムは富岡へ連行され、拷問が始まります。横木に縛られたアダムは3月の冷たい潮風の中にさらされ、死なな
ないよう、夜は小屋に入れられました。朝
から晩までつるされ、9日間続きました。
しかし彼は、9日間の祈り（ノベナ）のよ
うな気持ちでその苦しみをささげました。
この責めが効果ないと判断した川村は、ア

ダムを小さな小屋に60日間閉じ込めます。
彼は外部を離れて60日間の黙想ができる
と思い、この苦しみを喜んでささげまし
た。「私はただ神様のお助けと慈悲におすがり
するだけだから、祈ってください」と、祈
りの日々を牢の中でささげています。

富岡で60日間牢に閉じ込められても棄教
しないアダムを見て、藩主の寺沢は死刑を
命じました。処刑は4、5日後になると、
みんなに触れまわりますが、信者たちはど

うせすぐに処刑するだろうと思います。信
者たちの思いは的中し、人目を避けて行わ
れましたが、アダムが処刑場に連行された
時、信者たちはすでにその周りにいました。

斬首するはずの刀は肩に食い込み、うま
くいかず、苦しみながら彼は殉教してい
きました。しかしアダムは、イ
エスのみ名を唱えながら生涯
を終えています。その後、キ
リシタンたちが遺体を取るだ
ろうからということで、遺体
には重石が付けられ、湾外の
海中に沈められました。殉教
したのは、1614年6月5
日の早朝です。

「私は高齢ですから」とは
決して言わないアダム荒川。
自分の使命をしっかりと見つ
め、自分にできることがあれ
ばそれに打ち込んでいく勇気
を、彼の生涯において見いだ
すことができます。活動と祈
りに満ちた生涯でした。

天草の殉教者（1人）福岡教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
アダム荒川	1614.6.5	富岡	60